編　集　後　記

京大数学同窓会にとって，2023年度は4年ぶりに通常の形で総会行事が実行でき，嬉しい年度となった．もちろん，このような喜びや安堵感をもったのは我々のみではないのは言うまでもない．教師と学生たちが，また学生同士が対面で自由に討論などが出来ないことは，大学にとっていかばかり深刻なことであったかは想像に余る．私などは若者たちが居ない大学などは考えたこともなかった．しかし，新型コロナウイルス感染症拡大によって若者たちが姿を消した大学構内の様子は，まさに異常であった．この感染症の5類移行によって，学生たちが帰ってきたことに安堵を覚えるとともに，我々同窓会も通常の活動ができたことは有難く感謝すべきことであった．

4年ぶりに開催できた総会行事での講演会は，一般向け数学啓蒙書翻訳家である冨永星さんが講演をお引き受けくださり，“数学を伝えるということ” とのタイトルでお話しくださった．

私は，同窓会の講演はそのたびに深い感銘をもって聴かせていただき，視野を拡げていただく有難い機会に感謝を覚えてきた．また，そのような活躍をされている同窓生を誇らしく思ったことであった．冨永さんの講演は上のごとき言葉だけでは済まない，心に痛みを感じざるを得ないものとなった．大学の理学研究科・理学部において数学を教えるということは，やがて次の若者たちに数学を教えるであろう多数の学生を対象にしている．私は講義を担当するごとに，このことはかなり意識してきた．

冨永さんの教師経験，その後のドクターストップ，そして翻訳家となった経歴の中から伝わってくる “数学のすばらしさを，如何にかして伝えたい” との熱情と工夫に心奪われる感であった．自分が数学を教えていた時代にこのような講演を聴いていたならば，自分の教え方ももう少しましになったのではと思うとともに，私の授業を聴いてくれた人たちに，済まないとの思いに駆られて心痛くなったことであった．

今回の同窓会誌にこの冨永さんの講演記録を載せることが出来たのは喜ばしいことである．そのために，ご多忙な中で記録を纏めるために多くの時間と労を割いて下さってことに深甚の感謝を表したい．

本号には，重川一郎さんが前号に続いて，“21世紀の数学図書室 (2)” を書いて下さった．4半世紀前，収蔵図書の並べ替えがあり，そのしばらく後に3号館の全面的耐震補強工事のための図書室を空にしなければならなくなった．そしてこの全面的改修工事を機会に図書室の移動が決まった．重川さんは，図書室移動という大行事の立案・実行の中心となって働かれた．重川さんの記事は，図書室という数学教室にとっての心臓部分の大手術の様子の貴重な記録である．

新任教授のご挨拶や，卒業生の文書を収録出来たことも感謝である．

例年のこととは言え，今年も会誌を発行できたことは感謝に堪えない．文書を寄せて下さった方々，発行のための実務を負って下さった方々に感謝を申し上げたい．

2024年8月

井川 満